

各科の現況と展望

循環器内科 この一年

診療部長兼循環器内科医長 酒井 博司

診療体制

平成20年4月1日に井川貴行医師が着任し、3名から4名体制となる。

診療状況（検査件数、手術など）

外来は4月よりすべての曜日で新患、再診の2診体制となり、患者数は1日平均70名であった。入院患者数は1日平均35名で在院日数は18日、病床利用率は94.6%であった。診療単価については外来が前年度並みであったのに対し、入院は前年度比142%と大きく伸ばすことができた。また、10月よりICU/CCUが稼働し、当科も急性冠症候群+重症心不全、感染性心内膜炎+DIC合併例といった重患を収容し、スタッフとともに治療に取り組んで救命できた症例を経験した。循環器科として診療の質的向上も実感できた一年であった。平成20年1月1日から12月31日までの心臓カテーテル検査は552件で、前年度に比べ1.2倍増であった。心カテは毎年大幅に件数が増加しているが、検査を支えていただいている特検看護師、放射線技師、臨床工学技士の皆様には毎年のことではあるが大変感謝している。カテの内訳は、診断カテが434件、PCIが107件（ACSに対する緊急インターベンションは32例、待機的インターベンションは75例）、PTAは10件、経皮的筋中隔焼灼術が1件であった。電気生理学的検査は前年度並であった。永久ペースメーカー移植術は37例（新規18例、交換19例）、埋め込み型除細動器移植術は2例、両室ペースメーカー（CRT）移植術が1名であった。また、今年度も循環器領域における検査の中では、エコーやホルター心電図といった生理検査がその

件数を大きく伸ばしている。検査技師の皆様の奮闘には心より感謝している。

学術活動

今年度は念願であった全国学会に1例、地方会、研究会に5例、講演会に3例発表した。全国学会の1例と地方会の2例、研究会の1例は研修医の発表であった。研修医の努力とともに、発表の指導にあたった指導医の熱意に感謝している。

今後の展望

今年度は両室ペースメーカー移植術を上川北部、宗谷、遠紋地区において初めて施行した。来年度もCRT（心臓再同期療法）による重症心不全症例に対する治療を積極的に行っていきたいと考えている。また、学術活動については、前年度に目標としていた発表数をほぼ達成することができた。今後も同等の成績は残したいと思っている。来年度は、当院で導入されるDPCにより、今まで行っていた入院中のスクリーニング検査（検体、生理、放射線検査など）が大幅に減少すると予想される。内科の大切な仕事は、病気の治療とともに疾病の早期発見・診断・予防にあり、その作業が我々の診療活動の重要なモチベーションとなっている。したがって、これらの検査をいかに外来にシフトしていくかを看護部門など他のスタッフと真剣に議論し取り組む必要があると考えている。診療収益という観点からはもちろんのこと、内科医にとって当院が魅力のない病院となってしまうことがないよう循環器内科としてもその体制づくりに協力したいと考えている。